

【供奴 現代語訳】

して来るか。さあて、して来よう今夜のお供。

ちよつと遅れてしまったが、旦那の足の早いには閉口するぜ。

こうなったら、田んぼを近道して、見失わないようにしようつと。

よっしゃ。

大きな御家紋の付いた台提灯は、あんまり振って、火が消えないようにしなければな。

綿入りで前のふくれた紺の「筒袖着物」を、派手に着こなすのが

奴 っつてもんだ。 ヤッコラサつと。

奴はよう、武家の、やれ格式とか、ずる賢い奉公根性なんかを

ホント、一切出すんじゃないってんだ。 ひびや、あかぎれは、

富士の雪が全部は溶けないのと同様、踵や脛に年中あつてもヨウ、

何時お呼びがあるか知れないお使いを、欠かさず勤めるという

正直者よ、オレは。

エエ、わきに寄ってくれ、頼むぞ、わきに寄れつてば。

急いで廓に、エエ、一目散に、息を切つて駆けつけるぞ。

おれの旦那はな、廓一番の、皆が知ってる色男さ。

折った羽織をシヤレた着こなして腰に巻き、きりりとダンディ。

袴の裾は、きりりと捲り上げてスネ毛を見せる股チラ・ルック。

旦那の後ろは、下男のおれがお草履を手を持ち、ご用の時は、

さつと「シユート」つて投げ揃える見事さなのさ。

旦那は歌舞伎の高手、足踏みのように、カッコ良く振り出して、

大阪役者の、姿や身のこなしに、似ておられるんだよ。

「どうだ、似ているだろ？」と旦那は言う、オレは、

「ええ、中村歌右衛門にそっくりでございます」とな。

いやあ、それこそ、派手で華麗な出で立ちなのよ。

色話して恥ずかしいんだが、ある女に、

「八重が一重に咲いて、嬉しい花はなあんだ？」つて、

はの字と、なの字の謎掛をしたのよ。

へへ、八重の着物を一重の襦袢にさせたっていう謎解きさ。

謎が解けたらサ、女は「嬉しい」と顔を伏せてね・・・

アア、どうにでもなれと思つたワケ。

浮名が立つても「人の噂は七十五日」つて云うじゃないか、ネエ。

ほんと、たまらないよ、露で化粧した初花が開くのはネ。

(ここで鼓と三味線だけの合奏が入る、演奏の聞かせ所である)

お顔も花も一目惚れで寝ちゃつてさあ、で、目が覚めたのよ。

あの夜は、酔いが醒めた後で拳酒やつてさ、ついついついつと

盃を差されちゃつて勝負をしたのさ。六、七、八でどうだ、

つて、五回目は九。まあ、夜通しのリベンジでも負けちゃつた。

肩は痛いし、按摩に貼らせた肩の膏薬は、翌朝は縮んでめくり

上がつてるし、眠気覚ましに据えた首筋のお灸も、腰に据えたお

灸の痕も、クツキリ残つていて大変だったぜ。

おつと、千鳥足でもな、半被を絡げて毛槍を振つてやろうか。

手首は槍に置き、掌でしっかり槍尻の石突を握つて、

コリヤコリヤ、コリヤコリヤ、

「お、成駒屋、日本一」つてやるんだ。ヨーイショつと。

(更に転調し、鼓と三味線だけの合奏が入る、聞かせ所となる)

オモシロイ奴だなあ、浮かれ拍子にノリノリで、知らない間に

旦那には見捨てられて、気付いた頃には狼狽之眼になつて、

こつちの店から出ては、あつちの店に入って探したりで、

提灯は点けたり消したり、忙しく灯しているうちに、肝心の揚屋

の店の門を歩き過ぎてしまつたよ。

令和三年十二月二十八日 大中正比呂 拙訳

(補注)

三味線の文化譜には「唄い」に併記の箇所がある。筆者の勘では、

原典の後段に記した注記の方が、作詞としては最初に書かれてい

たと思う。「供奴」が長唄として一般に演奏され、流行してゆく過

程で、幅広い年代層に受け入れられるように、あまり露骨な色事

の描写は手直しをされたのであろう。今日では、日本舞踊として、

子供さえもお稽古をして、舞い、かつ演奏するのだから。

本編では品良く訳しておいたが、諸兄の為に、「解説」では隠語

の掛詞も注記編の所も、訳と解説を試みよう。

大中正比呂 記

